

緊急わかめ増産対策事業

和田島地区における新規ワカメ養殖漁場の開発

棚田教生・加藤慎治

近年、本県のブランド品目であるワカメの養殖現場では、生産者の高齢化等による担い手不足や漁場環境の変化により生産量が減少傾向にある。このため、ブランドの維持・拡大のためには生産量の維持・増大を早急に図る必要がある。

本事業では、これまでワカメ漁場として利用されていなかった小松島市和田島地区沖合のノリ漁場において、新規ワカメ養殖漁場を開発することを目的とする。

材料と方法

従来のワカメ養殖漁場（区第78号内）の沖合に位置するノリ養殖漁場（区第79号内、以下「沖漁場」とする。）内において、ワカメの養殖試験を行った（図1）。対照区として、従来のワカメ養殖漁場内にも2試験区を設定した（図1、以下「岸漁場」、「岸漁場」とする。）。現地の漁業者が保有する三陸系の雌雄混合配偶体から生産した同一品種の種苗を用い、沖漁場では平成23年12月4日から、岸漁場では平成23年12月5日から、岸漁場では平成23年11月30日から海面養殖試験を実施した。



図1. 養殖試験実施地点

養殖試験では、種糸を巻き付けた長さ25mの養殖ロープ（写真1）を、各漁場の海上に延縄式で1本ずつ設置した。養殖ロープ上に着生しているワカメを1回/月の頻度で10個体以上採取し、測定用標本とした。採取したワカメのうち大きい個体から10個体を選び写真撮影するとともに、葉長及び葉重を測定した。沖漁場と岸漁場は平成24年3月29日に、岸漁場は平成24年4月6日に収穫した。

結果と考察

養殖期間中の両漁場における葉長、葉重の推移を図2、3に示した。葉長については、両漁場とも2月中旬までは生長が緩慢であったが、3月以降伸長し、3月末には、岸漁場で約178cm、沖漁場で約149cm、岸漁場で約137cmであった（図2）。葉重についても、葉長と同様に3月以降増大し、3月末には、岸漁場で約314g、岸漁場で約225g、沖漁場で約212gであった（図3）。

収穫量については、岸漁場がロープ1本あたり約220kg（ロープ1mあたり約8.8kg）、岸漁場がロープ1本あたり約160kg（ロープ1mあたり約6.4kg）、沖漁場がロープ1本あたり約150kg（ロープ1mあたり約6kg）であった。

沖漁場と岸漁場の3月末における葉長、葉重及び収穫量を比較すると、沖漁場では、岸漁場には劣るものの、岸漁場と同等の結果が得られた。

一方、岸漁場のワカメは漁場、ともに収穫時に葉体の汚れが多かったのに対し、沖漁場のワカメは汚れがほとんどなく、品質面は沖漁場のほうが優れていた。

和田島海域では、今期、漁期初期の高水温等の影響でワカメの生育が例年より大幅に遅れ、さらに12月下旬から2



写真1. ロープへの種糸巻き付け作業

月末まで長期間DINが低い状態が続き、色落ちが頻繁に発生するなどワカメの生育にとっては厳しい環境であった。通常の漁場環境下で同様の養殖試験を実施した場合には、各漁場とも今回より良好な値が得られるものと思われる。

今回の試験結果から、和田島地先の沖漁場において、良

質なワカメが岸漁場と同程度に生産できることが明らかになり、新たなワカメ養殖漁場としての可能性が示された。今後、当該漁場を新規ワカメ養殖漁場として利用することにより、和田島地区におけるワカメ生産量の増大につながるものと思われる。

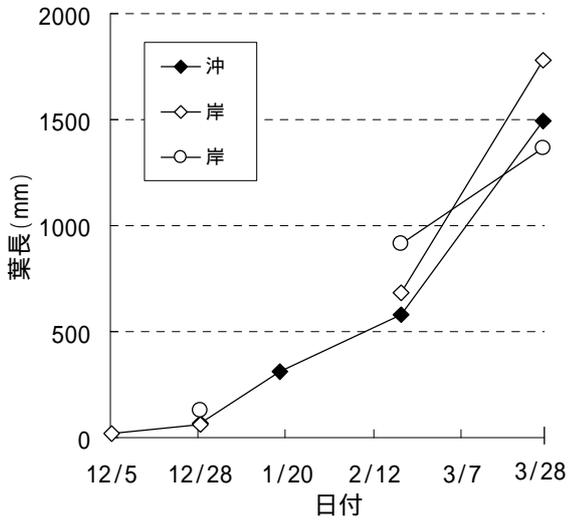


図2. 養殖期間中の葉長の推移

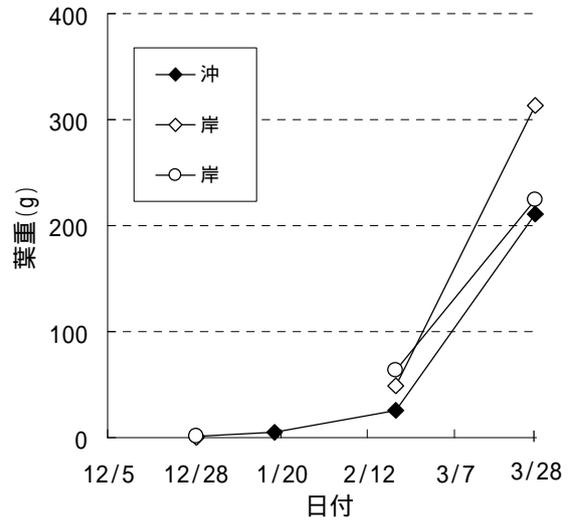


図3. 養殖期間中の葉重の推移



写真2. 沖漁場（左）と岸漁場（右）の養殖ロープで生育したワカメ（平成24年3月28日）



写真3. 沖漁場（左）と岸漁場（右）で養殖されたワカメ（平成24年3月28日）

スケールバーの長さは1m